



一般社団法人 日本LD学会  
Japan Academy of Learning Disabilities

# 会 報 第104号

【事務局】 〒108-0074 東京都港区高輪 3-24-18 高輪エンパイビル 8F  
TEL 03-6721-6840 URL <http://www.jald.or.jp>

## 主な記事

- ・2017年度公開シンポジウム（新潟）
- ・第1回研究集会（新潟）
- ・〈連続講座〉海外情報
- ・〈連続講座〉各地の発達障害者支援センターの取り組み Part II
- ・PATIO～実践の最前線～
- ・第3期代議員（社員）選挙の結果について



## 神経心理学から見た 発達障害と認知症

上智大学総合人間科学部心理学科

松 田 修

神経心理学は、脳機能と心理現象との関係を扱う学問である。神経心理学の視点は、発達障害と認知症を理解する重要な視点を私たちにあたえてくれる。

特別支援教育に心理学者として関わる一方で、研究者としての多くの時間を認知症医療に関わることに費やしてきた筆者であるが、これを自己紹介で話すとき驚きの反応をされることがある。

たしかに、発達障害と認知症では、その好発年齢や発現機序は異なるし、教育と医療では、そもそも役割が異なる。しかし両者には共通点がある。通常低年齢で症状が発現する発達障害と、高齢期に起こることの多い認知症とではあるが、どちらも脳機能障害による種々の神経心理学的症状が起り、それによって日常生活や社会生活に制約が生じ、そこに支援が必要になっているという点で、共通している。また、他の根治困難な障害にもいえることだが、多くの場合、どちらも今の医学では根治は難しく、障害を持ちながらも人生を歩ん

でいかねばならないという点も共通している。さらに、どちらも家族や関係者（例、教師、介護者）による個別の支援が不可欠であるという点でも共通している。

神経心理学の知見は、発達障害や認知症に起こる、一見すると不可解な行動の理解や対応に応用できると筆者は考えている。近年、注目されている生物心理社会モデルの視点から、これらの障害を見ると、神経心理学の視点は、社会（学校、職場、家庭など）の中で生じる困難が、生物（脳機能）－心理（心理現象）と、どう相互に関連しているのかを私たちに教えてくれるはずである。

発達障害と認知症の理解には、神経心理学の知見が欠かせない。なぜなら、どちらも神経心理学症状を基盤に、そこに身体的、心理的、社会的要因が複雑に関与して主訴が形成されるからである。両者の研究や実践から得られた知見が、神経心理学によって統合され、そこから新しい叡智が生まれることを信じて、今後も励みたい。